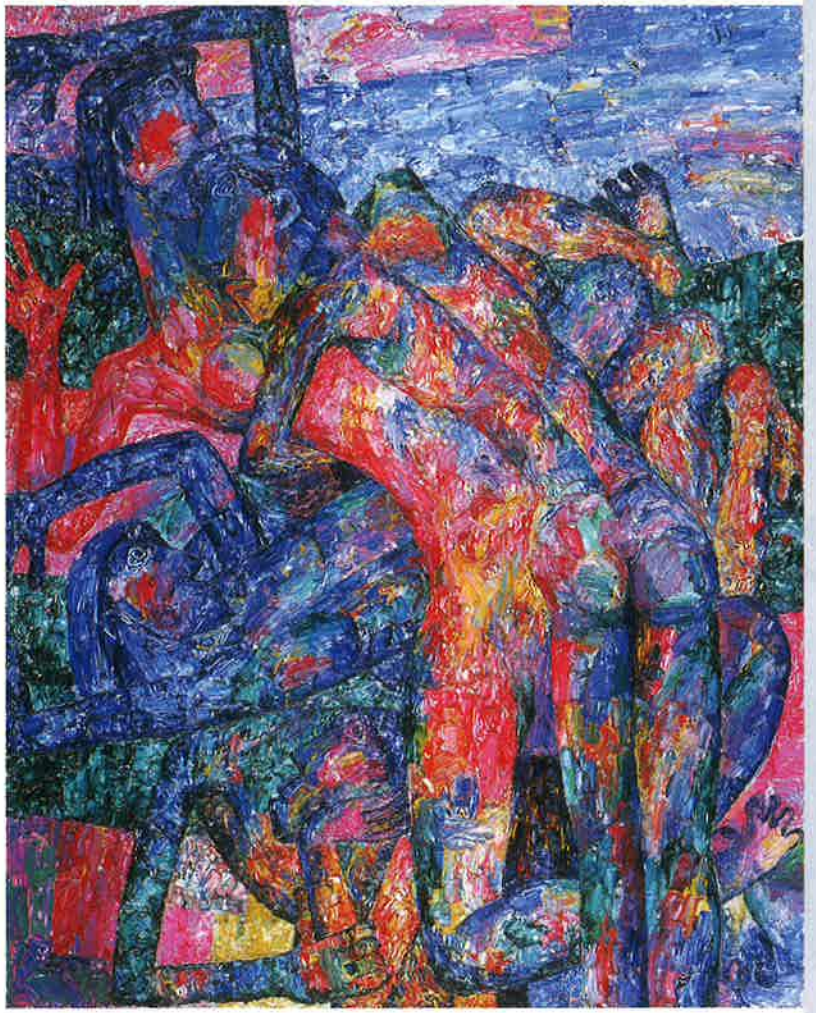
KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館だより



「人間B」1969年

contents

2　平成21年度常設展
「神田日勝の自画像～自分を見つめて」
「神田日勝の眼差し～いのちを見つめて」

3　第15回　蕪鋤祭
第17回　馬耕忌
第７回　日勝祭

4　平成21年度特別企画展「神田日勝と1970年の美術（Ⅰ）」

5　「森仁志の世界」展
「新世紀の顔・貌・KAO　30人の自画像2009」
「新出紀久雄の水彩画」
「第4回　十勝管内水彩作家展　水への誘い」
「グループ環　絵画展」
「ヴァガボンド鹿追展」
「オキナワ～ウミガメと少年」展

6　寄稿文
池田　緑
眞鍋　幸恵

7　新刊紹介　神田日勝と美術館関連の書籍
星瑠璃子著「新　小さな美術館への旅」
大竹昭子著「あの画家に会いたい　個人美術館」
内田康夫原作の「幸福の手紙」が漫画化
芥川喜好著「バラックの神たちへ」
神田ミサ子著「自分をみがく」
中学校の美術副読本に「室内風景」掲載

8　第15回馬の絵作品展
表彰式
馬の絵写生会
馬の絵受賞作品展

9　鹿追町内の学校と美術館との連携　総合学習とボランティア活動
美術講座
坂田明トリオコンサート

10　資料紹介「神田日勝が描いた漫画」

11　感想ノートより…24
図録、新装丁で刊行
キッズ・ボランティアの活動
アート・キッズ・クラブ2009

12　夏休み子どもワークショップ
冬休み子どもワークショップ
春休み子どもワークショップ
芸術鑑賞バスツアー
子ども芸術鑑賞ツアー
観光振興のため期間限定で入館料無料化

2010.3.31

27

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART
神田日勝記念美術館

〒081-0292
北海道河東郡鹿追町東町3丁目2
TEL(0156)66-1555
http://kandanissho.com/

前期常設展

神田日勝の自画像
～自分を見つめて

4月28日～11月1日

▲日勝、23才のころ

▲日勝、中学3年のころ

▲「自画像」1964年頃

▲「自画像」1956年頃

一九五六年頃の「自画像」は、顔の凹凸や陰影、頬の立体感などがしっかりとらえられているのに対し、六十四年頃の「自画像」は、真正面からがっしりした骨格の男の顔として、ベニヤにペインティング・ナイフで描く独自の画法で描かれています。六十三年頃の「飯場の風景」などでは、開拓農民などの労働現場の男たちを自身の生活に根ざした深い共感とともに骨太な人間像として、茶色を基調として描いています。

実際の日勝はどんな人物だったのか、小・中学校時代の友人たちの印象では、ユーモアがあり、相撲が強く、絵がとても上手だったそうです。青年団の活動にも積極的に参加し、弁論大会や演劇にも取り組み、活発な青年時代を過ごしたようです。

日勝は、「痩馬」を描いた初期から晩年の「馬」（絶筆）まで農耕馬を数多く描きましたが、後者では、未完成ながら馬の半身は緻密に描かれ、強い存在感を感じさせます。

日勝にとって「自画像」は、単に外面的な自分の顔をとらえるだけではなく、自分自身の生き方や思いを込めた魂の自画像だったのではないでしょうか。

▲左から渡邊禎祥（32歳）、神田一明（兄・33歳）、徳丸滋（32歳）、神田日勝（29歳）
昭和41年6月 札幌にて

平成21年度 常設展

後期常設展

神田日勝の眼差し
～いのちを見つめて

12月25日～平成22年8月29日

▲「死馬」素描

▲「牛」1964年

日勝は「牛」を六十四年と六十六年に二点描いています。目を引くのは切り開かれた腹の鮮やかな赤です。この赤は血の色を思わせ、痛いほど鮮烈です。対照的に牛の体毛や筵（むしろ）は焦げ茶から薄茶、石畳は灰色で冷たく感じます。一方「人と牛」の連作や「晴れた日の風景」は、鮮やかな原色を荒々しく厚塗りし、生命のほとばしりを感じさせ、「牛」とは生と死のコントラストを成しているようです。

日勝は飼っていた馬の死にも遭遇しました。十九才で帯広の平原社展で入賞した「痩馬」は老馬がモデルと思われ、六十五年の「死馬」は石畳に直に横たえられていて死を間近に感じさせます。素描は馬のそばに座る人々がいるのに対し、油彩は馬に迫った描写で、馬の死に立ち会っているような感覚に陥ります。

日勝はこれらの作品を通して、いのちのぬくもり、その存在感の確かさ、そしていのちの終わりをしっかりと見つめていたのではないでしょうか。

▲昭和32年頃 若號と

鹿追町民ホール　8月23日【来場者約80名】

第17回 馬耕忌

▲菅副館長、菅沼緑氏（左から）

本年は北海道文化財団とNPOアルテピアッツァびばい理事長の磯田憲一氏と、彫刻家で花巻市東和町の街かど美術館の仕掛け人菅沼緑氏を招き、「美術館と街創り」と題してアートディスカッションが行われました。

磯田氏は、「街力」が重要だと説き、小熊秀雄賞が一度廃止されたが、実行委員会が組織されて価値に気づいた例などから、神田日勝という宝を、街力を生かして皆が心を寄せる場として力を培って欲しいなどと述べました。

▲磯田憲一氏

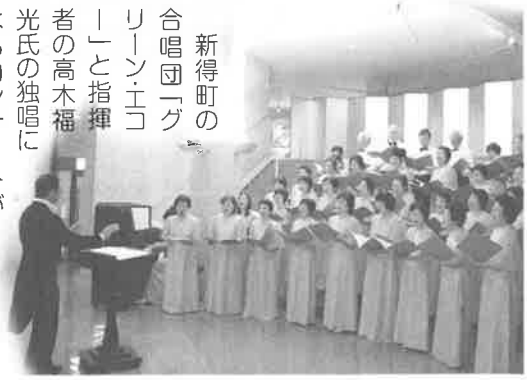
菅沼氏は池袋の生まれで、アトリエ長屋では芸術家のコミュニティがあり、人々の協力なしには生きられない場所で、北海道でも一時生活したことがあるそうです。現在は東和町で生活し、学芸員や酒屋の人と街かど美術館の企画が生まれ、商店主たちが協力して、美術が核になり人々の輪を広げる力を実感、鹿追も日勝の作品を核に町の誇りを作り上げて欲しいなどと述べました。

鼎談では、磯田氏が美唄の歴史とアルテピアッツァの場としての魅力、かけがえのない場所を守りたいと語り、菅沼氏は街かど新聞でPRした結果、作家と住民の交流が生まれ、アートは人の気持ちをつなぐものだと述べました。

また田中光俊氏のギター演奏の他、「グループ環」展出品作家が自作への思いや鹿追の印象などを語りました。

第15回 蕪堅祭

六月十七日【来場者約一五〇名】
神田日勝記念美術館
鹿追町民ホール


▲高木福光氏とグリーン・エコー

新得町の合唱団「グリーン・エコー」と指揮者の高木福光氏の独唱によるコンサートが美術館展示室を会場に開催されました。

第一部は高木氏の独唱でシューベルトの冬の旅から「菩提樹」など三曲、第二部はグリーン・エコーによる滝廉太郎作曲の「花」や新井満作詞の「千の風」など十曲が披露され、町内を始め近隣市町村からの来場者が聴き入っていました。

この後、町民ホールを会場にした交流会では、ワインとチーズの他、実行委員手作りの山菜料理が提供され、アンコール演奏も披露されました。

第7回 日勝祭

十二月八日【来場者約四十名】
神田日勝記念美術館
鹿追町民ホール

神田日勝と同世代で、笹川に住み交流のあった大下栄一氏、濱口豪氏、古谷政勝氏を招き、美術館友の会事務局長の武田耕次氏の司会で、思い出やエピソードを語っていただきました。

一才年上の大下氏は、日勝を人のことを悪く言わない男らしい性格で、目にしたものを即座に描く才能には驚いたと語り、同級で友人の古谷氏は、日勝には茶目っ気があり、相撲が強く、よく相手をさせられたこと、演劇では日勝は宇野重吉のファンで、アドリブが印象に残ると話し、濱口氏は一才年下で釣りや相撲、演劇に一緒に取り組んだ思い出や、自分を飾らず人の悪口を言わない日勝の性格のほか、制作中の絵を見た思い出を述懐してくれました。

その後来場者は神田日勝記念美術館に会場を移し交流を深めました。

▲濱口豪氏、古谷政勝氏（左から）

平成二十二年度特別企画展
「神田日勝と一九七〇年の美術(I)」

十一月三日～十二月六日／神田日勝記念美術館

岡沼秀雄「北辺の夜〈赤い馬〉」

渡邊禎祥「廃車(B)」

岸本裕躬「母子の絵図」

本田明二「北洋の男」

神田日勝「室内風景」1970年

一九七〇年は神田日勝が没した年であると同時に、主要な作品発表の公募展であった全道展の二十五周年記念展の年にもあたりました。

日勝がこの展覧会に出品したのは、記念展図録には『人間B』が掲載されていますが、実際は最後の完成作となった畢生の大作『室内風景』でした。

本展は、その時の全道展の会場を飾った作品群で構成し、時代風潮を再現する試みの第一弾です。

企画段階で公的施設に収蔵されている作品は五点にとどまり、作品の劣化や出品作不分明という状況の中から、日勝作品を除いて油彩十二点・版画二点・彫刻二点の作品が展示できました。画壇を席巻したアンフォルメルの潮流からの脱却が始まった時期にもあたり、そのことは展示された個々の作品からも一端をうかがうことができます。

25周年記念
全道展図録

またこの時代は十勝全道展の青春期ともいえ、北海道美術館賞を岡沼秀雄、奨励賞を渡邊禎祥が受賞した外、齋藤健昭・齊藤隆博・霜村英靖・米山将治といった作家の意欲作も一堂に会することができました。(なおこの記念展は七月帯広市民会館にも巡回、日勝は体調不良を押して中核的存在として、準備に奔走しました。)

神田日勝「人間B」1969年

出品者のひとこと～神田日勝～

結局、どう云う作品が生れるかは、どう云う生きかたをするかにかかっている。どう生きるか、の指針を描くことを通して模索したい。

どう生きるか、と、どう描くかの終りのない思考のいたちごっこが私の生活の骨組なのだ。

機械文明のあおりを受けて人々が既成品的生活を強いられるなかで、クリエイティブな我々の仕事は既成品的人生へのささやかな反逆かも知れない。

二十五周年記念全道展帯広巡回展目録
一九七〇年七月

「森仁志の世界」展

四月二十五日～五月十日
鹿追町民ホール
【入場者 七八名】

長野県在住の版画の刷り師森仁志氏のフランス・カルナックの巨石群を描いた油彩二十一点と、岡本太郎、池田満寿夫、大沢昌助、三栖右嗣、森仁志の五作家の大版画を同時に展示。

カルナックの数千年の時の重みと緻密な描写による迫真的な作品と、刷り師としての熟練の技による著名作家の大版画は、会場に緊張感と圧倒的な存在感を感じさせました。

「新世紀の顔・貌・KAO 三十人の自画像二〇〇九」

四月二十八日～五月十日
神田日勝記念美術館
【入場者 七三名】

美術評論家・中野中氏の企画による自画像展。全国の画廊を巡回する展覧会。六号大を中心に、全国の公募展で活躍する作家の個性的な作品が並べられ、同時期の常設展の神田日勝の自画像の関連作品との対比を鑑賞しました。

「新出紀久雄の水彩画」

六月五日～十日
鹿追町民ホール
【入場者 二八四名】

国際的に活躍する水彩画家の同会場での四回目の展覧会。西欧の古城や橋など風情のある風景を中心に瑞々しく緻密な描写の透明水彩の世界を展開させました。オープニングでは新出ファンなどが参集しました。

「第四回 十勝管内水彩作家展 水への誘い」

八月十一日～十六日
鹿追町民ホール
【入場者 五三名】

中西堯昭、中谷有逸、瀧川秀敏各氏を始めとする十勝管内の水彩作家による展覧会。十勝など北海道に取材した四季折々の風景や花、旅先の心惹かれた風景などの色彩豊かで瑞々しい作品が展示され、多くの水彩ファンが来場しました。

「グループ環　絵画展」

八月十八日～二十三日
鹿追町民ホール
【入場者 三五六名】

北海道の公募展の枠を超えた具象のグループ展として十回記念展。出品作家は十四名。北海道の自然や人々の暮らしの何気ない風景など情感溢れる作品が並びました。最終日は馬耕忌に併せてエンディング・パーティーが開催され、橋本禮三、香取正人、岩佐淑子の各氏など九名が参加し、自作の外、神田日勝や美術館の印象などを語りました。

「ヴァガボンド鹿追展」

十一月三日～十一月六日
神田日勝記念美術館
【入場者 六五七名】

ヴァガボンドとはフランス語で放浪者を意味し、阿部典英、渡會純价、米谷雄平の三氏を中核とする展覧会で、中谷有逸、秋山祐徳太子の二氏が参加、「神田日勝と一九七〇年の美術（I）」展と併せ、迫力ある作品が並びました。鹿追中学校での鑑賞授業に併せ、阿部氏の特別授業も行われました。

「オキナワ～ウミガメと少年」展

十二月八日～二十三日
神田日勝記念美術館
【入場者 六九三名】

「となりのトトロ」などのジブリ作品の背景画家として著名な男鹿和雄氏の「オキナワ～ウミガメと少年」展を中心とした展覧会。女優の吉永小百合さんがライフワークにしている広島、長崎の戦争の惨禍を扱った原爆詩の挿絵画として出品されました。

寄稿文

「開館三度目の夏のこと」

池田　緑（現代美術作家）

私は今、十勝毎日新聞一面の「編集余録」欄にこれまで掲載になったコラムをまとめている最中だが、十五年の間には懐かしい出来事も多く、読み返しの作業も滞りがちだ。

書き始めたのは一九九五年四月からだが、神田絵里子さんのことなども含め、神田日勝記念美術館関連の記述が少なからず見られ、改めて"神田日勝さん"を介しての良いご縁をうれしく感じている。

そんなこともあり、今回は新しい稿の代わりに、一九九五年の八月二十五日に掲載になった「馬耕忌」と題する「編集余録」文を紹介したくなった。「温故知新」という訳ではないが、私自身がこの文から、"神田日勝さん"を中心とする活動の今後に繋がる活力を得たような気がしたからだ。それに、現在学芸員として勤務されている釜沢恵子さんのお名前などもあって、不思議な巡り合わせを感じたりもしたから…。

第1回 馬耕忌　斉藤季夫氏、中野祐一氏（左から）

＜数日前の本紙で、神田日勝記念館の入館者がついに十五万人を突破したことを報じていた。三年目の今夏も、道内や全国から多数の観覧者が訪れており、好調のようだ▼地方の文化ということばがしきりに使われ出し、地方文化の見直しが図られ、今や地方から都市に文化を発信する時代に入った。人々は、感動で胸が高鳴り、心が潤うような、"すぐれたいいもの"でありさえすれば、遠くだろうとどこだろうと、出かけて行くのをためらいはしない。神田日勝の絶筆の「馬」をはじめ「ごみ箱」「飯場の風景」などが評判になったのは、これらの作品が、人々を魅了する力を持っているからだろう▼その神田日勝の生涯と画業を偲ぶ第三回「馬耕忌」が、鹿追町民ホールで二十七日（日曜日）に開催される。第二回「馬耕忌」は、司会にNHKのアナウンサー斉藤季夫氏を迎え、生前の神田日勝と親交のあった人たちが、思い出やエピソードなどを語りあった。第二回「馬耕忌」は、神田日勝記念館初代館長米山将治氏に次いで二代目館長となった作家の高橋揆一郎氏、美術評論家の竹岡和田男氏などが「神田日勝の世界」について語った▼今回はトークショーのコーディネーターに北海文学主宰の鳥居省三氏を、パネリストにオホーツク文学館館長の加藤多一氏、荒井記念美術館学芸員の釜沢恵子氏、神田日勝記念館学芸員の菅訓章氏を迎え、白熱したトークが期待される▼「馬耕忌」の名付けの親は、大正時代に二十二歳で夭折（ようせつ）した天才画家村山槐多の作品を集めていることで知られる信濃デッサン館館主の窪島誠一郎氏。きょうは、昭和四十五年に三十二歳でこの世を去った神田日勝の命日である。＞

と、このような熱気こもる開館三度目の夏なのでした。

第3回 馬耕忌　鳥居省三氏、加藤多一氏、釜沢恵子、菅訓章（左から）

「日勝さんと子どものまなざし」

眞鍋　幸恵（上士幌町立上士幌中学校）

鹿追中学校に美術教師として赴任していた五年間。神田日勝記念美術館との出会いは、馬の絵コンクールや展示室での授業など、学校と美術館をつなぐことを学ばせていただく貴重な機会となりました。今回は、五年間で子どもと日勝との関わりや私自身が学んだことをご紹介したいと思います。

まず、美術の授業で展示室を訪れた時、神田日勝の作品への子どもたちのまなざしは、いつも新鮮でした。「絵の具が盛り上がっている」、「筆のタッチが細かい」などの感想があり、図版では分からない作品の質感やスケールを味わっていました。いつも意識していたのは、子どもの視点で絵を読み解くこと、友達同士で意見や見方を交流することでした。作品の造形的な要素を探索し、その中から作品の主題や当時の背景などを話し合いました。例えば、モノクロームから色彩豊かに変化した画風から、人生の変化と重ねたり、「絶筆」や「飯場の風景」などの作品からは、生命の尊さ、開拓

の苦労への感謝など、様々な意見が出ました。また、多くの生徒が、「日勝さん」と親しみのある呼び方をしていたのも印象的で、ふるさとの画家として大切にされている地域の思いも感じました。

次に、「馬の絵」の審査員や講師などでは、子どもたちの表現とふれあうことができました。小中学生の千点以上の作品が町民ホールに展示されるのは圧巻です。写実性の高い緻密な作品が注目されていましたが、小学校低学年の原色や勢いのある線やお祭りなどの地域文化と関わりのある馬の姿にも惹かれました。

当時、賛否両論あったかもしれませんが、夏休みの宿題として全校生徒に描いていただきました。その理由の一つは、地域の美術館の試みに参加してもらいたかったこと、二つ目は馬の絵を描いたことが夏の思い出となり、鹿追を離れてもふるさとを思い出せるような大人になってもらいたかったからです。絵が苦手な子も得意な子も、みんなの作品が町民ホールで展示され、数点は商店街のウインドーギャラリーにも展示していただきました。回を重ねるごとに、入賞を目指す生徒も出るようになりました。その中で、「日勝さんのような画家になりたい」と話していた女の子がいました。作品を何度も手直しをして、粘り強く描いていたのを今でも思い出します。

携帯電話やインターネットの普及もあり、生活が便利になった最近では、十勝の農村地域でも、都市部の子どもとあまり変わらなくなってきました。一方で、神田日勝の作品の中には、便利になっていく暮らしへの警鐘ともいえるようなものを感じるものもあります。絵の具を丁寧に重ねられた作品を見ていると、「人間らしく生きることとは何か?」、「何を大切にするべきか?」を問われているような気がします。これからも、子どもたちが、「日勝さん」の絵を通じて、自分の生き方を見つめ、ふるさとを大切する心を育んでほしいと思います。

新刊紹介 神田日勝と美術館関連の書籍

星瑠璃子著「新 小さな美術館への旅」

著者が自ら取材に赴き、心の琴線に触れた全国の個人美術館の中から、神田日勝記念美術館が北海道の六館のひとつとして紹介されています。

大竹昭子著「あの画家に会いたい 個人美術館」

「馬と開拓民たちへの鎮魂歌」と題し、神田日勝の生涯と作品から感受されたものを紹介しています。

内田康夫原作の「幸福の手紙」が漫画化

名探偵・浅見光彦が活躍するミステリー小説の漫画化。神田日勝の「馬(絶筆)」と美術館が重要な鍵として登場します。

芥川喜好著「バラックの神たちへ」

画家にあてた架空の手紙というスタイルで十四人の画家をめぐるエッセイ集の「荒涼たる幻視の行方」と題して神田日勝を紹介。

神田ミサ子著「自分をみがく」

神田日勝の夫人・ミサ子氏の俳句と日勝の絵画を添えたエッセイ集。「体はまだ温かい」「日勝と私」の表題のものなど収録。

中学校の美術副読本に「室内風景」掲載

中学校の美術の副読本に「人物表現を見る 人、生きている」という頁で神田日勝の「室内風景」がフリーダ・カーロ、石田徹也、奈良美智らの作品とともに掲載。

第15回 馬の絵作品展

十月六日～十二日
鹿追町民ホール

文部科学大臣賞の梅原誉生さんの作品は、馬が歩み寄ってくるような迫力があり、背景もしっかり描かれています。油彩やパステルの技法を生かしたり、親馬と仔馬の触れあい、疾走する馬や馬同士でじゃれ合う姿など、構図や情景、とらえ方にも工夫が見られた他、毎年熱心に取り組む学校も見受けられます。

本年は審査委員特別賞として釧路町立遠矢中学校の外、入賞十四点、入選三十一点、佳作四十五点が選出され、羽幌町立中央公民館と七飯町文化センターで巡回展が開催されました。

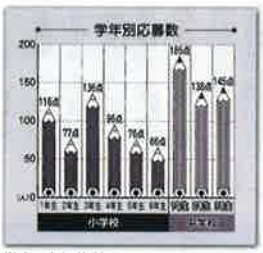
第15回 馬の絵作品展入賞者

○文部科学大臣賞
羽幌町立羽幌中学校1年 ―― 梅原誉生
○北海道知事賞
浦河町立浦河第二中学校3年 ―― 阿部一真
○北海道教育委員会教育長賞
鹿追町立上幌内小学校1年 ―― 菊池陸斗
○鹿追町長賞
鹿追町立鹿追小学校6年 ―― 松井大和
○鹿追町教育委員会教育長賞
旭川市立愛宕中学校2年 ―― 藤田大地
○神田日勝記念美術館長賞
小樽市立朝里小学校5年 ―― 早坂雪乃
○北海道新聞社賞
釧路町立遠矢中学校1年 ―― 中谷優希
○十勝造形サークル委員長賞
豊頃町立豊頃中学校2年 ―― 千葉俊之
○帯広市教育研究会図工美術部会長賞
釧路市立鳥取中学校3年 ―― 高橋澪央
○JR北海道社長賞
北海道教育大学附属釧路小学校3年 ―― 柴田彩花
○北海道電力帯広支店長賞
苫小牧市立泉野小学校4年 ―― 西谷彩乃
○帯広信用金庫理事長賞
鹿追町立上幌内小学校2年 ―― 三嶋凪
○ホテル福原社長賞
旭川市立愛宕東小学校5年 ―― 藤田翼
○審査委員特別賞　釧路町立遠矢中学校

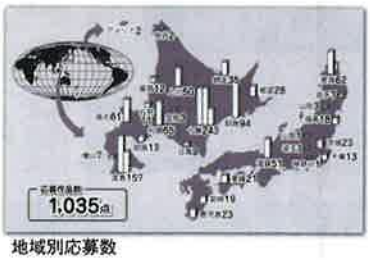
文部科学大臣賞
羽幌町立羽幌中学校1年　梅原　誉生

北海道知事賞
浦河町立浦河第二中学校3年
阿部　一真

北海道教育委員会教育長賞
鹿追町立上幌内小学校1年
菊池　陸斗



学年別応募数



地域別応募数

「表彰式」

10月10日／鹿追町民ホール
【参加者 入賞7名・入選16名 計23名】

文部科学大臣賞の賞状を受け取る梅原誉生さん

「馬の絵写生会」

七月二十八日／鹿追町ライディングパーク
【参加者 小学生三七名・中学生二名 計三十八名】
■講師 出村英和氏・下倉直江氏

体験乗馬の後、馬の写生を行い、ウリマックホールで作品を仕上げました。馬のとらえ方、顔や足、動いている馬をどう描くかなどのアドバイスを講師から受け、馬と触れあったり、馬と画用紙をにらみながら一生懸命取り組みました。

馬を見ながら写生

「馬の絵受賞作品展」

三月九日～二十八日／神田日勝記念美術館
【入場者 六六〇名】

平成七年、高橋揆一郎館長の発案でスタートした「馬の絵作品展」。鹿追町長賞、文部科学大臣賞などその時点の最高賞受賞作十五点を展示する展覧会が開催されました。現在は募集範囲も全国へ広がり、特色ある展覧会として発展している様子と同会場に展示された日勝の馬を鑑賞していました。

鹿追町内の学校と美術館との連携

総合学習とボランティア活動

▲高文連ボランティア専門部研究大会

▲阿部典英氏と鹿追中学校の生徒

神田日勝記念美術館では、鹿追町内の学校との連携を図り、美術館で鑑賞や美術など神田日勝について学ぶ機会を提供したり、職場体験やボランティア活動の場として活用される一方、学校の中では総合学習や図工・美術・道徳の授業など多角的な面から神田日勝を取り上げています。

鹿追中学校では五月八日に全校道徳の時間に、副館長が神田日勝について講話を行い、十一月六日には造形作家の阿部典英氏が、鹿追町民ホールで道徳の時間を活用して二学年対象の授業を行うとともに、総合学習として「神田日勝と一九七〇年の美術(I)」展・「ヴァガボンド」展を鑑賞しました。

また、鹿追高校は、アート・キッズ・クラブや馬の絵作品展のボランティアに同校のボランティア同好会の生徒が参加、小学生との触れ合いや展覧会の準備や作品返却作業などの大きな力になっています。

八月二十一日には高文連十勝支部ボランティア専門部研究大会が鹿追で開催され、学芸員が美術館での今までの活動を紹介しました。

鹿追小学校は三月二日に三学年が美術館で鑑賞授業を行いました。

▲鹿追高校のボランティア同好会

美術講座

「信州の二つの美術館をめぐって」

七月二十八日／鹿追町民ホール【入場者 二十六名】

▲窪島誠一郎氏

「信州の二つの美術館をめぐって～信濃デッサン館と無言館～」と題し、両館の館主・窪島誠一郎氏が講話を行いました。村山槐多ら夭折画家の作品を展示するデッサン館と戦没画学生の遺作を展示する無言館。前者の入館者が減少し、後者が盛況という現状を紹介し、重要なのは数ではなく、作品を通して画家の生きざま、描く歓びなどを感じることと語りました。

坂田明トリオコンサート

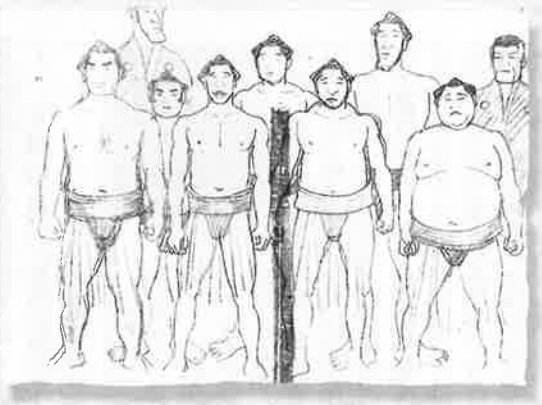
九月十七日／鹿追町民ホール【入場者 約二五〇名】

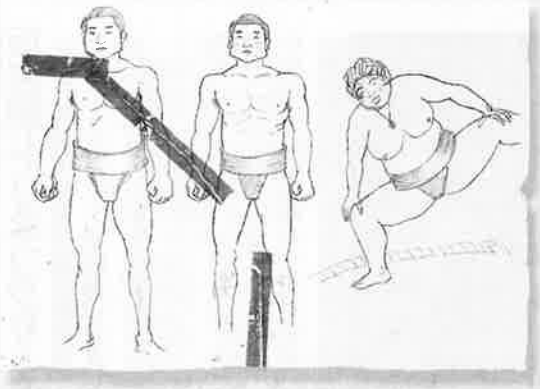
坂田明（サックス、クラリネット、ボーカル）と黒田京子（ピアノ）、水谷浩章（ベース）トリオの鹿追での二回目のコンサート。自身のプロデュース作品を中心に即興も交えて演奏しました。

資料紹介

神田日勝が描いた漫画

この資料は、神田日勝が二十三歳頃（一九六一年）実姉登美子さんの息子二人のために描いた「漫画」の一部です。登美子さんによれば甥たちは「愉快な絵を描いてもらえる日勝の家に遊びに行くのをとても楽しみ」にしていたといいます（北海道新聞松田新得支局長の取材談話より引用）。舌を出した馬を引く骸骨・踊る妖怪のような人物像の外、大の相撲好きだった日勝らしく多くの人気力士が描かれています。特筆すべきは、ミサ子夫人や登美子さんの夫博氏、博氏の実弟稔氏がまわし姿で描かれていること。いずれもその顔の特徴がよくとらえられています。日勝の人柄をしのばせる珍しい資料といえます。（菅）





図録、新装丁で刊行

新しい図録は美術館の所蔵と寄託、借用作品を中心に、神田日勝の著述文や年表、施設紹介等で構成されています。（美術館窓口で取り扱っています）

キッズ・ボランティアの活動

アート・キッズ・クラブや子どもワークショップなどの事業を補助するために募集されたキッズ・ボランティア。

鹿追高校ボランティア同好会の生徒四名と成人女子二名の計六名が登録、主にアート・キッズ・クラブの活動に参加しました。

またこの成人のキッズ・ボランティアと美術教諭と母親を中心に組織化に向けた準備会としてアート・キッズ・クラブ実行委員会を結成しました。

実行委員会では、アート・キッズ・クラブ特別編として十月十七日に折り紙工作を実施し、十三名が参加しました。

母親やキッズ・ボランティアからは「小さい子のいるお母さんも気軽に参加できるように」「もっと広く声かけをして工作好きな方に参加してもらっては」などの意見や要望が寄せられました。

アート・キッズ・クラブ二〇〇九

五月二十三日～翌年二月二十日
鹿追町民ホール
【参加児童二十名】

学校の週末活用事業として、八回の工作プログラムが組まれ、特に今年度は美術館で二つの作品をじっくり鑑賞することも加えました。

内容は折りたためるバースデーカード、手作りティシュボックス、動くおもちゃ、水に浮くおもちゃ、ダンボールでカレンダーとパズル、とんとん相撲、神田日勝の「馬（絶筆）」をベニヤに模写する、などです。

小学校低学年が多く、カッターの使い方に苦労する児童もいましたが、キッズ・ボランティアの協力で作業が進み、デザインを変えたり、色塗りにこだわるなど創意工夫する姿が見られ、「もうひとつ作りたい」「お母さんと一緒にとんとん相撲で遊びたい」などと感想を述べていました。

▲ティッシュボックス製作（6／20）

▲カレンダー製作（11／14）

感想ノートより―㉔

とても感動致しました。とても生々しい作品ばかり。いたましい人をなくしてしまいました。

2009.7.1　釧路市　Y.S.

5年ほど前、帯広に越してきて、すぐ鹿追へは来てみましたが子どもが小さかったのでここへは寄りませんでした。大きくなったら一緒に来ようと思い、今日実現しました。日勝さんの絵は初めて見ました。キャンバスではなく板に描くというのは、少々不思議な感じもしましたが、力強さを感じることができました。若くして亡くなられましたが、存命であれば、どれだけの作品を残したかと思うと残念です。

2009.7.25　帯広市　F

小さい頃に来たことがありますが、覚えていないので、夏休みの最後に来ました。神田日勝の作品は生活感が溢れていてとても好きです。存在感がすごいです。同時にどこか寂しげであるところも好きです。美術館にいつまでもいたいと思ったのは初めてです。本当にありがとうございました。またいつか来ます。

2009.9.18　札幌市　R.S.

実物を見て、心の奥を貫かれました。ありがとうございました。

2009.9.20　札幌市　H.T.

子どもワークショップ

夏休み

「ぐるぐるもようをいろいろつくっちゃお！」

八月八日／鹿追町民ホール【参加児童 八名】

■講師　高坂 光尚（ぐるぐる作家）

白い厚紙にクレヨンやマジックなどでぐるぐる模様を描きましたが、参加者の中には、大蛇やロボット、絵文字をデザインするなど、講師も子ども達の創造力やアイディアのすばらしさに驚いていました。

冬休み

「楽しいペン立てをつくろう！」

一月八日／鹿追町陶芸工作館【参加児童 十六名】

■講師　三上 一正（陶芸工作館）

鹿追焼き用ねんどで、手で回すろくろを使ったペン立て。受け取ったねんどの固まりを手でたたき、指で中央に穴を開けて筒状にしてから三角や四角、ハート型など変化をつけて仕上げ、講師が釉薬をかけて焼成、完成品を嬉しそうに受け取りました。

春休み

「ピンホールカメラで写真をとろう！」

三月二十六日／鹿追町民ホール【参加児童 二十四名】

■講師　中井 由香（ブライダルカメラマン）

紙箱のピンホールカメラを用意し、暗室で印画紙を装着、窓からの景色や空の雲などに向けて約五秒露光、再び暗室で現像。画像の出来具合にカメラの難しさと面白さを体感していました。

芸術鑑賞バスツアー

五月十日／北海道立近代美術館【参加者 二十名】

特別企画展「佐伯祐三」展とこれくしょんギャラリーの「はじめに光ありき　美術にみる光の表現」と「版の旅　北岡文雄展」を鑑賞。特に没後八十年を記念する佐伯祐三の初期からパリに渡って三十才で夭折するまでの代表作の数々に参加者は魅入っていました。

子ども芸術鑑賞ツアー

三月十四日／北海道立帯広美術館【参加児童 九名】

「ポップ・アート　1960's→2000's」展と「美術のみ・か・た　油絵と日本画」展を鑑賞。アンディ・ウォーホルなどのポップ・アートから、常設展の油絵や日本画とその画材、また畳状の台の上で座って屏風絵を見るなど、作品鑑賞を楽しみました。

観光振興のため期間限定で入館料無料化

二月十九日～三月三十一日

然別湖のコタン村開設に伴い、帯広駅から然別湖への無料バスが運行されていることから「コタンで遊び、日勝で学ぶ」という意味合いで神田日勝記念美術館の入館料無料の期間が設定されました。この期間に鹿追を訪れる観光客や十勝管内の美術ファン、そして町民が多数来館し、期間中に開催された「馬の絵受賞作品展」も話題となりました。